

中川小学校入学式

ぴかぴかの1年生

4月上旬、市内各地で入園・入学式が行われました。

4月9日には中川小学校で入学式が行われ、来年4月に角館小学校と統合をすることから中川小学校としては最後の入学式となりました。

今年度は4人の新入生が中川つ子の仲間入りをし、1人ずつ名前を呼ばれると元気に「はいっ！」と返事をしました。

また、2年生の4人は新入生に向けて「時計が読めるようになりました」「なわとびでかけ足とびができるようになりました」など、学校でできるようになったことを発表し、最後にきらきら星を演奏しました。

高橋雅己校長先生のあいさつの中で、皆で頑張る3つのこととして「①相手に届く元気で明るいいあいさつ・返事 ②早寝・早起き・朝ごはん ③交通安全」と紹介し、「わかること、できることを一つひとつ増やして夢に向かって頑張っていきましょう」と話しました。



ちよつと緊張気味の新生入生。4人のお友だちが中川つ子に仲間入りしました。



入学式後には、新生入生に黄色い帽子が贈られました。黄色い帽子を見かけたら安全運転をお願いします。

災害時に障がいがある方を受け入れ

仙北市×社会福祉法人秋田ふくしハートネット

福祉避難所の設置運営に関する協定を締結



左から青柳市議会議員、秋田ふくしハートネットの久米力理事長、門脇市長。

4月3日、仙北市と社会福祉法人秋田ふくしハートネットによる「福祉避難所の設置及び運営に関する協定締結式」が、愛仙の華（西木町西荒井）で行われました。

この協定は、災害時に福祉避難所を愛仙の華に開設し、生活支援が必要な障がい者を受け入れるもので、障害者支援施設に福祉避難所を設置するのは、仙

北市では初めてとなります。

締結式で社会福祉法人秋田ふくしハートネットの久米力理事長は「東日本大震災で障がい者が避難所でつらい思いをされたことを知り、福祉避難所の施設整備の必要性を強く感じた。今後は、幅広く皆さんから愛されたい」と話しました。

オリジナルフレーム切手

『みちのく小京都「角館」その六』販売開始

このたび、日本郵便株式会社東北支社が『みちのく小京都「角館」その六』と題したオリジナルフレーム切手の販売を4月12日より開始しました。

これを記念し、同日、秋田県東部地区連絡会より仙北市に寄贈いただきました。

販売されるのは、角館の桜を中心に武家屋敷通りの風景がデザインされたフレーム切手1500シート（1シート62円切手×10枚 1200円）。仙北市、横手市、大仙市、美郷町の全郵便局のほか、仙北市内の各花まつり会場の出張販売所でも購入ができます。

これまで発売されたフレーム切手は82円切手でしたが、気軽に出すことができるはがきに貼りたいという要望が



切手を通して角館を全国にPRします。

多かったことから今回販売されるのは62円のフレーム切手です。

堀田稔十文字郵便局長は「地域に密着した郵便局は、その地域のいいところをPRすることが1つの使命。角館を日本全国に知ってもらうために、たくさんの方に切手を使ってほしい」と話しました。

仙北市消防団長に 渡辺勇悦氏が就任



消防団長に就任した渡辺氏。

長年にわたり仙北市の消防団活動にご尽力された藤島絹雄消防団長が3月31日付けで仙北市消防団長を退任し、後任に渡辺勇悦氏が就任しました。渡辺新消防団長には、仙北市の安全・安心のため、より一層消防団活動にご尽力されることを期待します。

市長の

まちづくり

No.149

日記

『幸多き時代となりますように』

仙北市長 門脇 光浩

令和元年をお祝いし、市民の皆さま、また市にとって、幸多き時代となりますように祈念を申し上げます。

改元は、新しい時代の幕開けです。昭和から平成に、そして震災前後で価値観が大きく変質したことを考えれば、令和の時代に起こる社会変革は、もっと大きなものになると考えられます。

様々な統計予測の中、例えば観光分野では、外国人観光客の取り込みでプラス分析です。仙北市はインバウンドで成果を上げていますが、さらに市民一人ひとり、そして農林業や商工業との連携で経済波及効果の拡大が狙えます。

また、例えば人口動態の予測では、ついに東京都も人口減少時代に突入（2025年以降）することから、日本の少子高齢化、人手不足、生産性の確保など課題が山積みマイナス分析です。国が首都機能を維持するため、さらに財源を投下するようなことがあれば、全国への税の分配は低下し、ますます地方自治が困窮すること考えられます。でも、気持ちマイナスイ思考になってはいけません。私たちは困難な課題を何とか乗り越えて今日を迎

えています。厳しいときこそ打って出る挑戦だけが道を拓く術です。

ところで、前述の2つの統計予測を改善できる手法として、イタリアで始まった「アルベルコ・ディフーズ」も有効ではないかと考えています。和訳は「散在型ホテル群」でしょうか。町内や集落などエリア全体が、空き家を改修した民家ホテルの集合体みたいなイメージです。

起源は40年以上も前のこと。イタリアの一部の地方で地震が群発し、多くの人はやむなく故郷を捨て、離れた都市部に移住しました。地震がおさまった後、村は空き家ばかりの寂しい場所になってしまったそうです。でも、わずかに残った村人たちは諦めませんでした。何とか村に活気を取り戻そうと知恵を出し合い、それがアルベルコ・ディフーズに成長したと伝えられています。そこには長い歴史や文化、人、食、自然との出会いは空き家対策、雇用対策、人口減少対策としても魅力的です。

国内では、岡山県矢掛町や滋賀県大津市などが取り組みを始めました。仙北市でも検討の価値は十分にあるかと…。